

会 議 録

会議名 (審議会等名)	平成24年度第3回生涯学習センター運営委員会		
事務局 (担当課)	教育振興部 生涯学習センター 内線4567(757-8481)		
開催日時	平成24年12月20日(金)午前10時～12時16分		
開催場所	生涯学習センター 講義室1		
出席者	委員	大塚啓子、大音裕子、堀田啓子、常行貞臣、石津容子、 安藤真弓、山本朗、西谷久範、渡瀬順之 (欠席:松浦孝治)	
	その他	教育長、教育振興部長	
	事務局	中定久紀、喜田由加里、藤原育子、海野恵子	
傍聴の可否	可 ・ 不可 ・ 一部不可	傍聴者数	0 人
傍聴不可・一部不可の場合は、その理由			
会議次第	1.教育長挨拶 2.議題 平成25年度生涯学習短期大学事業計画について 本科(4学科) オープン講座(3講座) その他 課外講座(3講座) 生きがい学習塾 第20期応募方法及び優先入学枠について 3.報告 (1)平成24年度生涯学習短期大学事業の実績について (2)平成24年度生涯学習短期大学第18期修了式について (3)生涯学習センターの移転について 4.その他		
会議結果	別紙審議経過のとおり		

審 議 経 過

1. 教育長挨拶

教育長 12月9日付で教育長に就任いたしました。よろしくお願いいたします。今第5次総合計画の策定の時期で、街づくり、人づくり、その観点でいまライフテーマというものを4つほど決めています。市は“幸せ”というキーを前面に出して市民の“幸せ”をどういう風に手がけていくか、市としては大きな方向性を決めているところです。特にその中でライフテーマという大きな目標が4つほどあります。ライフテーマの1つは暮らし、暮らしが安全・安心、そして生きがい、最後つながり、この4つのライフテーマの中で施策も第4次のときは教育とか文化とかそういう言葉でしたが、今回は住むという言葉が入り、最後は挑むと行政上の取り組みを決めて10の施策のなかで政策をあげて取り組みの柱としております。その中で生涯学習も教育のなかで生きがいという大きなテーマのなかに、育つという就学前教育、学ぶというところでの学校幼稚園教育、社会教育の中に大きな柱の中にこの生涯教育につながる取り組みも、柱として入っております。そういう中で人の一生を“幸せ”と、おそらくきっと幸せを追求して願って生きていくと思いましたが、そこはすべて豊かさとか夢とかがあって、生涯学習の視点にたちますと生涯学習の前期に命をいただいて乳幼児期から学生さんの時代があったとします。そして社会に出て自分が職業をとおして、または家庭に入られるかもしれませんが、そういう学生時代の生涯学習の転機があって、そして職業に就いて実質的には社会に出て職業として、または家庭にはいってボランティアとかそういう取り組みをとおして生涯学習の一番中核になる時代を送られ、そして次に息子とか娘たちにバトンタッチしようかな、とか、後輩に譲ろうかとか退職なさって次の新しい世代、生涯学習の後期をむかえる、そういった大きな一生涯の取り組みがあると思います。そういう人の生い立ちを考えたときに、この生涯学習の特に後期、ほんとうは成人全部ですから20歳以上の方々を中心にした学生さんを含めてのレフネックのあり方とか、川西市の生涯学習の取り組んでいきたというものの、この委員会をとおして今後の取り組み等につながろうかと思えます。そういう面では生涯学習の後期に限らず広く、社会教育からひろがってですね、一人一人の市民の方々の自分の生き方とか、豊かさとか、幸せを追及していく、この柱として、この会とかレフネックのありようが求められていくものと思えます。そういう面では今日この委員会におきまして、平成24年度の反省とそれから、25年度に向けての事業計画をとおして、より新しい、発展した形で市民にお返しできて、川西市の生涯学習の発展の柱として運営できればと事務局として思っております。今後ともよろしくお願いいたします。

2. 議題

(1)平成25年度レフネック事業について

委員長 みなさんおはようございます。今日は今年一番の寒いなかでしたが、お越しいただきま

してありがとうございます。いま、教育長のお話を伺いまして何となく心温まっておりますが、私ども普段生涯学習センターで何を協議していくのか、もう一度原点に戻ったような示唆をいただきましたような気がいたしております。若い世代に向けて提言、または何かお話しできることがあればいいなと、そういったところで思いました。私共一人一人の生き方、生涯学習が問われているのがこの委員会と思います。それでは議事にうつります。平成25年生涯学習短期大学事業計画について事務局から説明をお願いします。

本科(4学科)

事務局 説明をさせていただきます。

まずは今年度の生涯学習短期大学の4学科、それと3コースありますオープン講座、課外講座、生きがい学習塾という生涯学習短期大学の主要事業につきましては、去る12月8日でもってすべて終了したところでございます。委員の皆様のご貴重なご意見で自己実現の機会が得られたというふうな学生からの声も多く、まずはお礼申し上げます。実績につきましては、のちほどご報告させていただきます。

さて、来年度の事業でございますが、去る6月22日に開催いたしました第2回運営委員会でもいただきました貴重なご意見にのっとりまして、教育機関等へ交渉、協議してきましたところでございます。6月の時点では教育機関や講師等へは直接協議はしておらず、確約した講義案ではありませんでした。今回は、予備にあげていた講義もとりあげておりますので、よろしく願いいたします。

なお例年通り本科につきましては70人定員で、2年間で40回、オープン講座につきましては150人以上で3から4の講義を実施するのに適した内容で具体化したものでございます。それではお手元にお配りしております資料1ページからご覧ください。

まず平成25年度生涯学習短期大学事業計画について説明いたします。こちらの方の学科も20期になりました。20年目の学科でございます。

まず地域・環境政策学科につきまして説明いたします。これは、6月の第2回運営委員会では総合政策学科としてご提案させていただいたものでございます。川西市の新しいマスタープランが平成25年度にスタートするにあたりまして、現代社会そして人類が直面する課題をあげ、様々な視点から考察しようとするものでございます。ご指導いただく先生方は関西学院大学総合政策学部の先生方で統一しております。1年次最終講義の清水先生も関西学院大学へご転校の予定でございます。なお同大学の総合政策学部は全国で4番目に開設されました政策系の学部でございます。ヒューマンエコロジー、直訳しますと人間生態学を通じまして、人間と環境の相関関係を探求するために設置された学部です。生涯学習短期大学で、政策、行政に関する学科を学科としてトータル的に取り組むのは初めてのことでございます。講義の内容につきましては資料をご覧くださいの通りでございますが、まず初回の講義は高畑学部長に学習部分につきまして導入部分での説明をいただきまして、公共性と地域マネジメント、政策論、暮らし、活動、安全・安心、環境アメニティについて、1年次には各専門の先生方にご指導いただく予定でございます。なお、今回、関西学院大学の先生方が2年間、40回の学科を体系的にご担当いただくというのはレフネックの中で

初めてのことでございます。こういった各大学とのつながり、先生方との人的なおつきあいを続けていくことも蛇足ではございますが、レフネックの継承、継続には必要なことと付け加えさせていただきます。

続きまして2ページをお開きください。来年度のもう一つの学科は宇宙・天文学科でございます。

6月の運営委員会では天文学科という紹介をさせていただいておりました。この学科は地域・環境政策学科とは異なりまして平成9年、平成16年と実施してきました大阪大学の理学研究科の地球科学についての学問をこのたび宇宙・天文学に視点を移し2年間学科といたしまして実施させていただく予定でございます。この学科は、大阪大学大学院芝井教授をキーパーソンに初回から担当していただく予定でございます。1年次につきましては、大阪産業大学、大阪府立大学、神戸大学、京都大学等、西日本の第一人者の先生方に宇宙・天文学の講義をいただく予定です。生涯学習短期大学レフネックにつきましては、今の本科の間あいだに例えば「はやぶさ計画」の計画から実施、またその成果まで、大阪大学の先生方の講義を継続して実施してきた経緯がございます。その中で学生の中から、又再び夢のある、そうしたロマンのある学習をと待たれており、こうした内容でこのたび、宇宙・天文学の内容が固まった次第です。また6月に運営委員会でご提案させていただいた時には有史以来研究されてきた天文文化について、天文学の文化について考察すると申しておりましたけども、学部、学部長との検討の中で、文化学、例えば星占いなどを入れることによって、学習の内容がぶれるのではないが、目的が薄まるといった懸念から宇宙科学のみに特化しております。

続きまして、3ページ、2年次の講義に説明を移らせていただきます。19期生の建築学科、水資源・環境学科について説明いたします。また、のちほど報告させていただきますが、両学科とも好評のうちに1年次を終了しております。

建築学科の1年次は、建築の歴史を紹介していく中で建築学の全体像の紹介に力点がおかれまして、2年次につきましては現代社会の諸問題に建築学がどのように寄与していくのかについて考察いたします。講義テーマを見ていただくとわかりますように、2年次前半は災害に対応した建築学、後半には少子高齢化、省エネ、アメニティや環境協定の講義に続きまして2年間の講義を終了する予定でございます。

続きましてもう一つの学科、水資源・環境学科は、1年次は水に関する諸問題等を学習いたしました。その中で基礎知識の習得をし、最終講義では先生の指導の下、講義が終わった後で「利き水」近隣の浄水場や名水といわれるもの、そういったものを数種類準備いたしまして「利き水」も実施するなど講義外に研究の機会が与えられたり、学生の学習発表があったり等、学習内容も非常に工夫されております。「しんどいけれども非常に楽しい」と言った講義が続いた次第でございます。2年次のこちらの学科は「サステナビリティ」という言葉で統一された学科が続きます。サステナビリティとは孫の世代にも継承できる持続可能性をもじった言葉でございます。サステナビリティをキーワードに水資源環境の講義をします。それと最後は各学生に小論文とは別に論文執筆、また研究成果の発表を実施しまして2年間の学習を締めくくりたいという計画で予定しております。

オープン講座(3講座)

事務局 続きまして6ページをご覧ください。オープン講座、こちらのほうは3コースについて説明させていただきます。まず6月につきましては、音楽文化講座「演歌と大衆文化」の3回の講義を実施する予定でございます。講師につきましては、非常にユニークな研究をなさっておられましてブラジルのアフロ音楽を研究されていた輪島裕介先生ですけれども身近な日本の演歌に着目しまして近代日本文化、大衆文化の有力な要因となった演歌の経緯についてご考察いただく予定です。先生はこの研究で2010年に執筆されました「創られた「日本の心」神話 「演歌」をめぐる戦後大衆音楽史」という本を著されまして、翌2011年、第33回サントリー学芸賞を受賞されました輝かしいご経歴をお持ちの先生です。

続きまして7月の講座は、笑い与健康講座「笑って!ストレス解消、生活習慣予防」を3回の講義で実施する予定です。前回の運営委員会では予備講座としておりましたけれども、古事記に関する古代史講座が、今年～来年と古事記編纂1300年を受けまして関連の講座が各地で実施されており研究者からもあえて「重複実施になりますよ」と親切な講師からは「どどこでもやっておりますよ」といったようなお声かけもありましたことから、重複実施を避けるために変更したものでございます。大阪大学の医学部の研究者として多忙な先生から以前研究されていた「怒り」から「笑い」に研究を広げられ、自らも「日本笑い学会」にも所属しておられましてそちらの理事としても活躍されておられます。自らがそういう落語家さんと一緒に笑いの世界に身を投じながら現在、健康講座として非常に多方面から注目され要望され講演をされておられます。できましたらこの講演会を通じまして川西市民の日々の実践、また笑いを通じまして健康につながる、そういう講座になるものと期待しております。

最後は9月にあります文学講座です。「司馬遼太郎「街道をゆく」 アジアを読み解く旅(韓国・中国・台湾)」の4回コースで実施します。人気のある司馬遼太郎、その著書「街道をゆく」にスポットをあてまして立命館大学名誉教授でプール学院大学学長の木村一信先生を核に、奈良大学木田准教授、大阪学院短期大学の竹松教授と3人で4回の予定で分担していただき実施していただきます。司馬遼太郎の目からみた考古学としても非常に興味深く、日本を含む東アジアの情勢を理解するためにもアジアという地域を愛しつづけた司馬遼太郎の考えを検証したいと思っております。なお、蛇足になりますが、木村名誉教授と先ほど説明いたしました水資源・環境学科の仲上教授につきましては、木津川学長とご面識がある、同じ立命館大学という縁でこのレフネック生涯学習短期大学の講義調整に非常にご尽力いただいているということをつけ加えさせていただきます。

その他 課外講座(3講座) 生きがい学習塾

事務局 以下、その他の講義について説明させていただきます。まず課外講座につきましては、レフネックの4つの学科の垣根を越えて学習していただくものです。パソコン講座につきましては初めてパソコンに触れる初心者を対象とした入門コースを1コース、使って

いたけどしばらく操作から遠ざかっておられた方が多々ございます、初級コースを2コース、それから初級から続けて受講し、熟達したいという要望もあるため応用コースを1コース計画しております。この教室はレフネック生OBからなるパソコンクラブの有志の面々でご指導いただいて進めております。課外講座の申込み状況についてはまたそういった有志でしておりますので、今言いました入門、初級、応用につきましても柔軟に対応していきたいと思っております。

それと二つ目の陶芸教室につきましても好評でございます。学習を通じて家族の方々への器や陶器を作ったり、私どもが感銘しますのは、作品が焼きあがって窯をひらくとき、作品が並べられた瞬間に学生さんから感嘆の声が上がる場面を毎年見ております。4回の継続ですけれども講義以外にも窯入れのために時間を割かれたり、遅くまで土を練ったりの時間外の姿を見ましても熱心な陶芸入門教室の一つの特徴です。

最後になりますが郷土史教室につきましては社会教育室のほうが関わってもらっております。ボランティアガイドのご指導も近年魅力的で永年続いておる教室です。現地視察や展示会の見学も好評を得ておりまして、今年は黒川の里山散策等を通じまして参加者が増えてきておるとい状況でございます。

第20期応募方法及び優先入学枠について

事務局 最後ですけれども本科につきましては第20期の応募方法と優先枠について説明します。さきほどの地域・環境政策学科と宇宙・天文学科、各々定員を例年通り70名といたしまして、入学案内巻末にございます応募はがきで受け付けまして公開抽選とする予定でございます。なお、例年この委員会でご審議いただきました優先枠も例年通り設けたいと思っております。今まで応募して抽選にはずれ入学できていない方には、定員のおおむね3割20名を優先入学枠を設ける予定で、いま準備を進めております。以上議題2につきまして説明させていただきました。ご審議をお願いいたします。

委員長 ありがとうございます。2の議案につきまして一括してご説明をいただきましたが、皆様のご意見をお聞きしたいと思います。まず、本科につきまして4学科ですね、最初は地域・環境政策学科、これに関しまして何かご意見ございますか。
関西学院大学の先生方で一括して通しで教えていただくということですね。

委員 この講義の内容も変わるわけでございますか。地域・環境政策学科(仮称)とありますが多少なりとも。

事務局 できましたら、この内容だと思います。学部長との調整でございますけれども運営委員会のご審議を経て決定といたしたいと存じます。関西学院大学これだけのフルメンバーで臨みますということで「関西学院大学総合政策学科」とかもございました。もうひとつ校風にもよりますけど関西学院大学の総合政策学科は各先生方の個性を重視されるところでございます。逆に言いますと、学部長が手を挙げたからと言ってみんな

がついてくるといった雰囲気ではなかったと実は聞いております。外国の先生方、英語で講義される先生方も3分の1ほどおられるということで、非常にまとめにくかったと。この講座の調整をもとに関学の総合政策学科がまとめたので、レフネックの講義全体で1冊の本をつくりたいというお話もあったほどでございます。その先生方が調整していただきまして、先週ようやく正式な名称として、地域・環境政策学科と言う名前をお答えいただいたところでございます。

委員長 よろしいですか。じゃあ、もう、この題で行きますということで、はい。

事務局 できましたらお願いしたいと思います。

委員長 つらつらと見ましたらいかにも関学らしいというのが入っております、宗教(とくにキリスト教)の視点から考える公共性など関学らしいという感じを受けました。初めての取り組みと言うことで、楽しみがありますね。

事務局 社会学部のなかの堅苦しい行政学とは異なっております、学部長自身も猿山の研究をなさっておられる、地域によりまして非常に平和な猿山、ボスの猿を頂点といたしましてエサを分け合うような民主的な猿山とそうではない、本州は特にそうらしいですけれども、力関係によってエサの配分が非常に異なる猿山がある等、非常にソフトでユニークな社会学を研究なさっておられる先生方が多数おられるようでございます。講義といたしましても幅広いものを期待しております。

委員長 何かほかにご意見ございませんか。無いようでしたら2つ目の宇宙・天文学科、これは6月の私共の運営委員会におきまして話題に出たものです。天文学を学問の中に入れていただければいかがでしょうかということだったのですけれども、あの星占いとかそういった部門はすこし外しておいて、純粋に学問としての天文学を考えていこうということですね。

事務局 いままで宇宙の勉強を学科として2回取り上げました。そのなかで半分以上が宇宙、または生命に関わる講義で、地球と言う名称がついておりましたけど、今回は昨今はやぶさ計画以来、とくに宇宙に関心を持っておられる方が多いということで、特に地球と言う名称から主題である宇宙ということになりますと、天文学と言う名称は陳腐ではないかというご意見も頂戴いたしまして宇宙・天文学という学科で示させていただいた次第です。

委員長 これは、見ておられますと銀河系とかビッグバンとか、我々が普段興味深いことでもあるし、まあNHKあたりはよく天体として放送されておりますけれど、これは純粋に宇宙の成り立ちとかいうことであって生命が関わっていくということには入っていかないのですね。

事務局 例えばですが、地球の生命が隕石によりまして渡来するとかになりますと、地球科学と

か、これまでの学科の中で考察がございました。隕石とかその中で生命反応、たとえば小惑星群の中の隕石を、実際に教室のなかで回されたりしたことがこれまでの学科でもあったんですけども、そういったところまで期待しております。今回この学科につきましては宇宙空間のより遠いところの内容で統一される予定でございます。

委員長 楽しみですね。たぶん映像をたくさん使った講義になるかと思われます。

事務局 小惑星群のなかにございますダイヤモンドの標本を教室の中で今までは回されたり経緯もございます。講義の中で、はやぶさ計画が非常に好評でオープン講座でも講演されました。今回も2年間の講義が終わってアンサー講義等のリクエストが高まるような気配もしております。

委員長 応募数も多いんじゃないかと思います。では、ご質問がないようでしたら、19期生の2年次のほうにまいりたいと思います。建築学科ですね。これは今回は地震に強い、震災に強い、建物に重点をおいた内容になるそうですね。

事務局 先生がまとめられた表題だけではわかりづらい横文字もございます。建築学のなかで横文字を使われているところで4ページの(5)災害とまちづくりのところ 災害に強いレジエントなまちづくり、レジエントといいますのは「回復力のある」という意味でございます。阪神大震災の教訓を受けて街づくりが回復していく、そういったものの講義でございます。それは今回の東日本の震災のなかでも今回の選挙でも大きな争点となっておったと思いますけれども、耐震の建築学の内容でございます。また4ページの(9)環境共生住宅の一番下の方でございます、非常にわかりにくい表題で申し訳ございません。ヴァナキュラー住宅とはその土地固有の住宅、また、地域に則した、地域に合った住宅と言う建築用語です。合掌造りとかまた地域独特の建築様式の日本の住宅様式のことと思われます。また、パッシブな手法と書いてございます。「受け身的、従順な」という意味だそうでございます。日本の各地にございますそういった住宅をご紹介いただきながら気候や風土に従順であるところをご紹介があるのかと期待しております。

委員長 ご意見ありませんか。

委員 今の、これは2年次だから募集年度でないからいいのですけれど、カッコしてわかりやすく書かれた方がいいかと思うのですが、ちょっとわからないなと思ったんですね。

事務局 実を申しますと先生のおっしゃるところの文章は学科の目的とか先生の言語を大切にしたい思いもございます。

委員 そうでしょうね。あの私、ヴァナキュラーとか全然わかりませんでしたものですから。

事務局 建築学を学ぶ学生に対して建築用語の横文字を入れております。

委員長 最近は難しい用語もいっぱい出てきますよね。

事務局 英和辞典を紐解くだけではちょっとわかりにくい専門用語です。

委員長 ちょっとわかりにくいですよ。まあ、講義の中では先生が順次教えられるんでしょうけど受ける側としたら、建築学に詳しい方が受ける訳じゃないですから、むしろ素人の方が受けるわけですから、丁寧に、カッコいれて要約を書いていただくと、わかりやすいのではないのでしょうか。

事務局 入学案内を出させていただくときに講師のほうと調整させていただきます。

委員長 そうですよ。よろしいでしょうか。そういたしましたら、もう一つの学科、水資源・環境学科「水と人と社会のあり方を探る」これも、サステナビリティ、難しい言葉ですね、持続性のある。

事務局 持続可能性という、サステナビリティです。日本語で書かれている、この研究も明治時代から続いているらしいです。いろいろ有名な中では忠犬八公の飼い主であった東大の先生あたりが研究なされたものが脈々と続いて今サステナビリティと言う学問に、環境学に結びつくようなところにいきわたったと、聞いております。こちらのほうもわかりづらいと思いますけれども次世代への警鐘、水資源だけではなくに環境学のほうにお話がいくのかと思います。

委員長 カッコしてずっと書いてありますね。サステナビリティ と。これにずっとして訳を入れると、ダサくなるというか潰すことにもなりますので、ちょっと無理かと思いますが、上のところに【ねらい】というのがありますね、この文章の中にちょっと一言いれていただくとわかりやすいんじゃないかと思います。

委員 これを日本語にするとどういうこと。

事務局 持続可能性、直訳すると持続可能性となります。
一つありますのが石油の枯渇問題とかでこの用語を使うようでございます。今の世代で化石燃料を使い切ってよいのかといった議論のなかで、サステナビリティと言う議論がされます。子や孫、ひ孫まで継続して安定供給できる社会を継続できるかといったところで。

委員 英語のスペルをいれたほうが。

事務局 こういった記述の仕方につきましては、また事務局で考えさせていただきます。また、入学案内のほうで余白がでてまいりますので、例えば欄外にことばの注釈など、ご覧になって分かっていただけのような工夫をちょっと考えます。

委員長 この文章をお書きになったのは、事務局ですか。教授のほうですか。

事務局 教授を中心に、原文を尊重しまして、非常に高度で専門的な文章を先生方がお書きになられたのを、担当者がかなりわかりやすくいたしました。

委員長 じゃあ、今からでもある程度、手を加えるのは可能なわけですね。

事務局 講師と交渉は可能です。

委員長 では、ねらいの方のなかにも、「サステナビリティと水資源環境」と言う意欲的なテーマに取り組みます。そのあとにひとこと入れられるといいですね。サステナビリティとは、というかたちで、ずっとわかりやすくなると思います。

委員 注釈なら、文章自体も変わらないので。

委員長 ただ、注釈というのは、下まで目が行かないといけない、だから文章の中で入れていただくのがわかりやすいんですよ。注釈なんか読まない方もありますから。できれば文章の中で入れていただく方がすんなりと読む側としてはわかりやすいというのがありません。これは事務局にお願いします。

事務局 また調整させていただきます。読みやすい文学案内の作成に努めさせていただきます。

委員長 そうですよ。水資源・環境学科につきまして他にございませんか。

委員 内容じゃないんですけど、1年次に入学された全員の方が2年次に上がられますか。

事務局 今年の1年につきましては現在のところ全員上がられる予定です。レフネックの講義の良し悪し、講義の内容にかかわったところではなく、元気な方はお仕事を決められた、また、自治会の役員がまわってきたというような理由が一番退学の要望では高いです。今後やむを得ない事情で退学が出てくるかもしれませんが、今のところ100%継続の予定です。

委員 今年度は、1年次はこの授業はやってないのですか。

事務局 今年度で19期生の方は修了なさいます。

委員 じゃあ、この間、前回いただいて書いてある中には今回は、無いってということですね、わかりました。

委員長 前期、後期ってありますからね。

委員 わかりました。

委員長 ほかにございますか。それでは、次にオープン講座のほうにまいりたいと思います。3 講座、毎年のことですが実施していただきます。非常に面白い感じの、受けたい感じの、楽しそうな講座を組んでいただきました。ご意見ございますか。

委員 私、今年オープン講座、受けさせていただいたんですけど、外部からも来られますが、その比率とかどの程度受けられたとか、ご期待に応えられなかった方というのは、データございますか。

事務局 外部からのハガキによるご応募の枠が 80 名、生涯学習短期大学レフネックの学生の申込みの枠を 70 名としております。手元に資料はありませんが、最近オープン講座へのご応募が非常に多うございまして、オープン講座ができたいきさつといたしましては 4 学科あります学科のご応募の倍率が非常に高く、落選された方の学習の機会としての意味合いも 3 コース 10 コマにはございました。おハガキで申し込まれた方についても非常に多くございまして、80 名ぎりぎりまで。ですから定員ぎりぎりにはなりますが、落選される方はここ数年おられません。ただ、レフネック学生につきましては、申し込みが多く、今年のオープン講座すべて抽選となりました。160 名まで定員の枠を拡大しておりますが 20 から 30 人受講できないものが出てしまう、そういったことが今年は続いておりました。

委員長 オープン講座というのは、学生が主体ですね、参加は。

事務局 80 名はハガキによります市民の方、70 名につきましては生涯学習短期大学レフネックの学生です。

委員長 一般の方、これは無料ですよ。

事務局 無料です。

委員長 有料ではないわけですよ。とくにございせんかね。

委員 一つ伺います。ねらいの最終のところに「単なる「好き嫌い」を超えた、新たな視点を獲得することを目指します。」の新たな視点を獲得することを目指すというのは、どうということですかね。

事務局 大衆文化につきましては演歌の「好き嫌い」から始まって、歌詞の「好き嫌い」もありますが、演歌はこういったことで文化としての地位を獲得したのだよと言ったようなことです。演歌は明治時代、自由民権運動の応援歌であった。それが昭和にはいって古賀メロディーになったり、美空ひばりとかいった天才的な歌手にめぐまれて、日本の生

活、心のなかに入ってくるということを考えると、演歌の好き嫌い、音楽ジャンルでの好き嫌いではなしに、ひとつの文化史として演歌と言うものを見つめなおしてみましょ
う、という意味でおっしゃっていることだと思います。

委員長 どうでしょうかね。

委員 視点を獲得するというのは、どういうことかと聞きたくなります。

委員長 好き嫌いという言葉にもなんか、暗に演歌を蔑視しているような、ちょっとランク下に見
ているようなニュアンスを見受けられますよね。各人の「趣味」と言いますかね「各自
の趣味を超えた」とか。

事務局 講義の枠をとらまえますと、非常に難しいところがあります。例えば美術、音楽、後の司
馬遼太郎の作品。こういったものを取りあげます時に一番問題となりますのが文学、
芸術の中の志向性という問題ですね。かつてレフネックで文学を取りあげたときに非
常に申し込みが少なかったということがございます。志向性が高い、言いやすくわかり
やすく言うと「好き嫌い」というものが講座を選定するときにネックになることがありま
す。演歌の場合、とくに蔑視ではなしに「あの歌詞は好きだ」「嫌いだ」また歌によって
「あの歌は好いなあ」心に共鳴できる歌を皆さん、この世代でしたら一つはお持ちだろ
うと。ただ、そういったものでは無しにもっと広く視座をとらまえて、学問として演歌の
一例をあげてみましょうというのが輪島先生のお考えかと思われます。

委員長 まあ、疑惑を感じさせる文言は避けるという、省いてしまうという理解で言えば、大衆音
楽および大衆文化について検索しますとかそのあたりで、1行抜かしちゃっていいんじ
ゃないかと言う気がしますけどね。

委員 新たな視点が広がるでしょう、とかね。

委員長 スーッと読んじゃえば別にどうってことないんですけど。

事務局 学問として高めておられる先生としての自信を持ったねらいの言葉と思われます。さき
ほども言いましたけれども、着眼点をブラジル音楽から演歌にかえられて大きな賞を
とられたということもあります。とっつきにくい先生ではなしに、本当に気さくで親しみや
すい先生です。書かれた中に好き嫌いと言う言葉はよく使われます。ポスター用のお
写真をお願いした時にも、わざわざ美空ひばりさんの表紙の週刊誌を前に持ってこら
れたり藤圭子のプロマイドとかを持ってこられて、非常に気さくな温かい先生の書かれ
た文章、その中で志向性と使わず「演歌の好き嫌い」という言葉をあえて選んでおら
れるかと思われます。

委員長 わかりやすく単刀直入でいってことですかね。大衆文化とか大衆芸能といえおの
ずと、あるもんですから。引っかかると言えば引っかかる、引っかからないと言えば引

っかからないというようなことと思いますが、いかがでしょうか。

委員 これもその輪島先生がこういう言葉を使われるという。

事務局 輪島先生の原文を事務局が分かりやすくし、ポスターのほうには美空ひばりや藤圭子のプロマイドとかを手を持ったような先生の姿が掲載される予定です。

委員長 新しい感じで良いと思いますけどね。固いばかりが能じゃありませんから。

委員 新しい分野の学問のカテゴリに入れてもいいと思います。

事務局 大阪大学の音楽を研究されている文学研究科では、オペラであったり、そういった学問を研究されている先生は見るからにクラシックな方ばかりですが、輪島先生はとくにユニークな研究をされておられ、見るからに砕けた感じかなと思えば、書かれている文章とかお考えはきちっとしたものをお持ちの先生ですので、非常に人気のある講座になるのではと期待しているところです。

委員 今年は歴史小説の講座を単発でされる、このあたりも一番いいと僕は思います。

委員 よろしいでしょうか。この次は笑いと健康講座「笑って！ストレス解消、生活習慣予防」これなども結構人気が出て応募数も多くなりそうですね。文学講座も司馬遼太郎で、沢山の方が多分応募なさると思うんですけど。まあ、4回で語り尽くせないみたいなこと有るかもしれませんね。

委員 これは東大阪は関係ないですよ。

事務局 関係がございました。東大阪にある記念館のほうは司馬遼太郎の奥様と義理の弟様が運営されておられます。弟様にとって司馬遼太郎は義理のお兄さんですから幼少の時より人生の指導者として面倒を見てもらった、勤められた新聞社も同じという縁もあって、今は記念館の事務長をされておられます。文学講座の中で1回ご登壇と話もまとまってっただんですが、出来上がったものを見て「大学の先生ばかりやないですか」ということでご辞退されるということがありました。いったんご了承に近いご返事をいただいておりますので、違う機会にまた交渉して奥様や義理の弟様、ご家族をとおしての司馬遼太郎のお話をさせていただくよう考えたいと思います。

委員長 ぜひお聞きしたいですよ。4回目に入れていただかないとね。

事務局 これも木村先生を通じてお願いしたのですけれども、やはり僭越と丁重にお断りなさいました。

委員長 残念ですね。じゃあ、やはり単独でお申込みされたほうがいいのかもかもしれませんね。

事務局 司馬遼太郎の生の姿を語る機会があったらということです。

委員長 それでは、その他に、課外講座、これは、パソコン教室、陶芸入門教室、郷土史教室がずっと続いてますけれど、一時パソコン教室は先だっただけでしょうか、終了してもいいんじゃないかとおっしゃってましたけど、また継続しているわけですね。やっぱり要望が多いってことですか。

事務局 当センターにはパソコンが20台ございまして、先生機1台も含めまして充実しております。市長部局と勘案してパソコンの買い替えの予算にも応じていただいております。いま、委員長からのご指摘につきましては、はじめてパソコンをさわられる方が少なくなってきました。初級につきましても、会社などで長らく使っておられた方のニーズがレフネックでは多い、これにつきましてもニーズは当初より減ってきておりますが、時代に合った機種を取り揃えており、レフネックの中の一つの学習の機会、動機づけとして考えました応用コースは非常に人気がございます。20台ぎりぎりまで使われるという講評を得ております。実を言いますと、入門を済ませてから初級にあがりたい、初級を済ませた後で、折角だから応用も勉強したいという方もおられます。また、蛇足ではございますが、応用が済んだあとでレフネックの自主的な学習へ進まれる方も多数おられます。ある意味、生涯学習の動機づけとしてパソコン教室も重要かと考えております。

委員長 同好会というのは、入門コース、初級コース、応用コースをずっとクリアなさった方がグループとして入っていらっしゃるわけですか。と言いますのは、4コースのうち応用コースだけ入りたいという方は、あるんですか。そういうのも受け入れてるわけですね。

事務局 入門、応用、初級、各コースにつきましてはOBさんを中心とした同好会の有志の方がご指導しておられます。このグループにつきましては当センターが丸の内町に来る以前から脈々とパソコンがお好きな方が集まって、技能の上達をめざして登録グループとして活動しておられます。今日も同好会が活動しておりまして、入門コース、初級コースは利用率が低いと申しましたけど、OBの自主グループの活動といたしましては20台フルに使われるグループが多くございます。そういったグループの中でも比較的指導者の育成に力を注いでおられたパソコン同好会を主とする、能力別に班編成されておられるのですけれども、そういったところでパソコン教室のご指導をいただいております。

委員長 これは、趣味の団体としてあるのですね。それとも、そういうグループで入っていらっしゃる方、ある程度のパソコンの技術をマスターしていらっしゃるわけですから、生涯学習センターの中の何か実質的に役に立っていただくということはございますか。

事務局 趣味でなさっておられると言ってしまうとそれまででございますが、長年の実績の中で、指導者として課外講座を牽引していただいております。

委員長 講師として、指導者として、それのみですか。

事務局 それ以外にも、例えば各地区公民館で「私のライフスタイル」ということでパソコンについての継続をなさっておられるという講演会をなさったり地域に出て活動なさっている実績を伺っております。

委員長 ぜひそう言った活動を増やしていただきたいですね。仲良しクラブだけじゃ意味がないですから。

事務局 以前は、外部講師に依頼して数名でもって指導していただく状態でしたが、現在では講師以外に4名ほどパソコンクラブの有志が、学生の手元をみてマンツーマンの指導が可能となって、同じ年代の人のご指導も学生のなかで好評となっております。

委員長 中学とかそういうところでは、パソコンはかなり今使われていますよね。生徒の中でどの程度。

委員 小学校から全部ITを使っています。以前は使い方の指導が主ですけど、今、中学になるとどう使うかという応用の方が力点です。先生方も授業でもITを使う方がおられます。

委員長 先生方まで、いろいろと講習をなさっておられて。

委員 教員1人に1台パソコンが配置されていますので、使えない先生はおりません。

委員長 先生が子どもたち自体に教えていらっしゃる。

委員 教科の中でパソコンを使う教科と情報、コンピュータを教える教科とがあります。小学校から学校にありますから。子ども達は大人が考える以上に進んでおります。

委員 小学校に補助で行かしてもらってたんですけど、技術を教えるより、ネットとかで恐さを教えるそっちの方を重点的にしました。

委員長 実際に委員の中にもパソコン教室みたいなところで腕を磨いていらっしゃるって、教えておられたんですね。そういった広がりがあると意味が出てきますね。

委員 子ども達は技術はすごい早いんですけどね、

委員長 そうですよ。

委員 今度は応用の場面とか、そんな、

委員長 いろいろ問題が多いですね。

何かご意見ありませんか。それでは、第 20 期応募方法及び優先入学枠について、これはもう毎年行われているとおりでよろしいですね。問題は出ておりませんね、毎年。

事務局 以前は一人ずつ抽選を引いていただく頃は、よくご審議いただきました。おかげで、今は問題もなく解消されております。ありがとうございます。

委員長 では、支障も無いようですのでそのように続けていただきたいと思います。それでは、次の議題にまいりたいと思います。事務局よろしくお願いします。

3. 報告

(1)平成24年度生涯学習短期大学事業の実績について

(2)平成24年度生涯学習短期大学第18期修了式について

事務局 まず24年度の生涯学習短期大学事業の実績について報告させていただきます。8 ページ9 ページの資料2をお開けください。

農学科でございます、昨年5月から今年12月1日まで40回の講義がございました。修了者は54人、80.4%の方が修了なさいました。2年間40回の出席率は87.8%で、うち皆勤者は12名です。

続いて文化遺産学科です、昨年5月から今年12月8日まで40回の講義が開催され、修了者64人、91.4%の方が修了いたしました。2年間40回の出席率は89.9%で、うち皆勤者は11名です。

続きまして19期生1年次でございます。

まず建築学科は、今年5月から11月まで20回、定員70名全員が修了でございます。出席率は90%、1年次終了時時点で皆勤者は19人です。

続きまして水資源・環境学科は今年5月から12月まで20回の講義、こちらも定員70名全員が修了でございます。出席率は91.7%、1年次終了時時点で皆勤者は22名でございます。

続きましてオープン講座について実績を報告いたします。

初回は6月の幸福度講座で、3回の講義でもちまして、延べ393人が受講いたしました。続いて7月の遺伝子講座は3回開催で、延べ397人が受講いたしました。最後の医学講座でございますが、こちらも3回開催いたしまして、延べ423人の方が受講いたしました。

続きまして、課外講座について実績をご報告いたします。

パソコン教室入門コースでは、1コース、講座にしますと4回実施いたしまして、受講者は延べ27人、初級コースは2コースを設けまして各4回の講義で延べ46人の受講者でございます。また、パソコン教室応用コースは1コースで4回実施いたしまして、延べ68人が受講しております。

続きまして陶芸入門教室では4回の講義を実施しておりまして、延べ43人が受講しております。

それと、郷土史教室につきましても4回実施しておりまして、延べ150人が講義、展覧会、現地学習と様々な場面に参加しております。

最期に生きがい学習塾でございますが、これは学生自らが教壇に立ちまして今まで人生経験のなかで豊富な知識や教養、経験を講義するというもので、10回でもちまして、講師が10人登壇しました。受講者は271人でございます。

付け加えますけど、文化遺産学科は12月8日の講義終了の翌週も関西大学にご準備いただき、ここにご在籍の常行先生のご尽力等によりまして、櫻木先生のご案内で関西大学博物館の展覧会のご案内とか、そういったことで、非常に有意義な時間を過ごしております。それと先ほども申しましたけれども、水資源・環境学科の利き水であったりとか、講義時間外に先生方のご指導をいただいているということもございます。また、学生自らが班編成を組みまして、学科が終了したのちに土曜日に空いているOALームで自主的な教室をしたり、生きがい学習ではないのですが、自らが勉強したことを披露するというものを今年だけでも具体的な数はつかんでおりませんが20回以上実施しております。生涯学習の中でも自主的な勉強が根付いておるのかと風を感じております。

引き続きまして10ページ資料3をお開きください。

平成24年度 生涯学習短期大学第18期修了式について報告いたします。修了式は来年2月16日10時からの予定でございます。なお、委員長につきましては記念撮影がございます。定刻より30分早くご来場のほういただきたいと思っております。また、お別れパーティーの方も予定しておりますので、車でのご来場はご配慮お願いしたいと思っております。ご用たくさんおありかと思っておりますが、できうる限りご臨席をお願いしたいと思っております。以上、あわせてまして報告させていただきます。

委員長 ありがとうございます。この件に関しまして質問ありませんか。

委員 生涯学習についてなんですが、基本的なとこに戻るんですが、いま川西生涯学習レフネックで学習されて知識も豊富になっていってるんな経験されてると思うんです。生涯学習の元々の意味って何なのかなって考えた時にいろいろ学習して学んで、良かったなあって終わる。それはそれで良いんですけど、やっぱり人のために自分はこんなに役に立ってるんだって、そんなとこまで生きがいたと思うんです。やったことがまた何かに貢献できるとか、街づくりとか、この川西の中であると、川西市の街づくりに何か貢献する。街づくりって言うときすごい大きな感じですけど例えて言えば大概の人は受講で終わっていると思います。終わった後で役立つことが生き自分たちの地域の文化とか、川西に住んで良かったとか、あ、やって良かったなって終わった後で思えるような生涯学習レフネックの修了を。確かに生きがい学習塾とかされてると思うんですけど、たいてい終わって、学習して良かったなって終わってるんじゃないかな。ちょっと根本的に思うんです。具体的にどうしたら良いかわからないんですけどね。

委員長 何回か過去にアンケート取っていただいている、講師として役に立ちたいですかとか、あるいは、そういうことしたくないとか、まあ、確かそうした数字が出てると思います。アンケートをまた一度、提出していただけたらと思います。確かに勉強することはどうで

しょう、生涯学習センターでいろんな知識を身に付けて、その場で終わってしまうんじゃないくて、あとまた地域でそれを役立てたらどうかと、突き詰めればそういうお話だと思うんですけど。そういう勉強の仕方、知識の取り入れ方、どういう風に思っていますか。

委員 私が委員になって当初から理念的には一貫して言っておられました。得られた知識を平たく言えば、地域に還元していただくためにこういうことをする。ただそれを具現化させるときに、じゃあどういう形になっているんですかとすると、非常に見えにくい。ということと言えます。リーダーを育てるということは皆さん思っておられる、そこについては、もうひとつ違う観点から言えば、これは僕の思いです。その地域の人がまず何を望んでいるかという大きな問題としてあります。出かけて行って何かしてやろうといった考えがあれば、まずそういう風にはならない、絶対に、僕の経験からも、求められて、初めてお手伝いしようかという観点でもってやらないと。最後は私の話ですけど。

委員長 そのためには地盤がないと。受け入れる受け皿がないとねえ。

委員 その受け皿、そこには歴史がありますから、いろいろな思いがあるんです、地元の人には。離れたところの人は「こうしたらいいんじゃないか」と思うんですけど、その接点がよっぽど上手いこといかないと「放っといてくれ、私等には私等のやりかたがあるんだ、昔から脈々と続いてきたものがあるんだ」と。難しいものがあります。問題も相当あります。

委員長 そうですね。今おっしゃったように、市としては、行政側としてはある程度非常に安い授業料で、あの、提供しているわけですよ、市民に。で、市民は高度なものを市からいただいている部分もかなりある。だから、そのためには、ただ戴くだけではなくて、市としてはある程度リーダーとか、地域にボランティアであれずるとか、還元してほしい、というのが市側の意図としてあると思うんですけど。その受ける側はそこまでわかって受けるかどうかというのがあると思うんですけど。それとやっぱり基本的に学習するということは、やっぱり受ける側の個性によって、人に受けたものは外にだしてという人と、いや、そうじゃなくて知識を入れるだけが目的で、自分を高めるだけの知識を導入するって二通りの方もいるので、いくら市が思われても、全部を還元するのはあり得ないんですよ。

委員 何か還元したいって思ってる方もいると思うので、卒業するときに、人材バンクじゃないですけども何かの時には協力しますという受け皿をつくって、何かをしようとするときには、ボランティアでいろいろ手伝ってほしい部分もいっぱいあるので、そういう人たちに声掛けをお願いしていくとあって、そういうのもあるといいんですよ。

事務局 委員長がおっしゃっていただきましたように、そういった議論がもとよりございました。整理しますと、もとより入学される方は「こういった学科がありますよ」ということで、例えば心理学に入ってこられる、水資源に入ってこられる、農学に入ってこられるというこ

とで、その学問の魅力、志の縁、志縁でもって入ってこられる方が多いんです。ところが入ってこられたあとで言われることは「退職後なにもすることがなかった、ここで人間関係ができた」ということで、どんどん2年間で地縁、地域に根差したご縁が深まってきます。で、今おっしゃっていただいたように、その結果レフネックのOBがどうなったかと言うと、ひとつにはパソコン同好会のようにここでの指導をしていただいたり、もうひとつは、形としてNPO法人の川西再発見がひとつの例です。非常に古いグループでありまして、マスコミにも働きかけて川西の良いところをPRしていただいたり、市役所の中に積極的に入り込んで展覧会とかをされている。そういったものもレフネックOBさんとして活動されている。もっと地道なものは、地縁で結びついた縁でたとえば、エドヒガンの保全、また黒川の里山、地域を超えますけど丹波篠山の里山の管理までグループを組んで行って帰りのパーベキューが楽しいとやっておられる。これらもれっきとした生涯学習の一つの成果だと思うんです。それを生涯学習センターがどこまで立ち入れるのかと言いましたら、委員長が今、言われましたように非常に難しいところがあります。ここに入ってきたからといって「勉強だけをするんだ」という方もいらっしゃって、例えばもうすぐ修了式もありますけど、修了式だけには出るけれども、お別れパーティーには「私は勉強しに来たんであって、個人としては求めておりません」と帰られるかたもあるんです。それはごくわずかです。皆さん、この2年間の学習を通じて人間関係を中心に友情を築かれて、それが地域に根差したご縁、地縁の場に結びついて行っております。というのが生涯学習センターの大きな成果と考えております。

委員長 そうですね。生涯学習センターは大きなものを残していったるわけですよ。NPOの川西再発見とかも、それとレフネックだよりもOBを中心にやってらっしゃると思いますけど、もうこれなんかレフネックの顔になっていますよね。そういうものを考えてみると、まあ、いくつか浮かび上がってくるんですけども、そんなもの皆さんご存知ないものから、一つ事務局としては、そういうものを皆さんに知らせる何らかの方法をまた考えて、また必要かとも思います。これは押し付けるものじゃないんですよね。それで、今残っているその皆さん活躍されているグループさんを見ていると生半可なエネルギーでやってらっしゃらない気がするんです。ものすごく、自分の時間を割いて一生懸命それに没頭してなさっておられるから、だからこそ質の高いグループが出来てくるんであって、これが何て言うんでしょう、軽い気持ちでやってんじゃあ、あまり意識の高いものが出来ないように思います。だから押し付けることは難しいと思うんです。ですから、いま出来上がっているグループを何らかの形で皆さんに知らせる方法、難しいと思いますが、その辺の知恵がどうでしょうか。

委員 こういうところを卒業された方は、そこから完全に離脱されて、またそこからリーダーが生まれて、歴史勉強会とか、いろいろと作っておられるんですよ。でも、それは見えません。電話がかかってきて対応して、いろんな話をきくと「実はこういうところの、どこかで」とそのグループが、全く町の中で活動されているグループが大学の先生を呼んできてやってほしいと依頼が来て、先生に行ったりしています。そこでも最近の一つの講座ではなくて何回かまとめてお願いしたいというところになりつつあるなど、それが私

の感想です。浸透してきてるなっと感じます。

委員長 非常に実質的な活動っていうのがぼつぼつと出て来ている、それも男性の方っていうのはご自分の退職後、ご自分の時間が有り余っていますから、エネルギーを、情熱をかけてなさっているから、良いものが出て来ているような気がするんですね。生涯学習センターも 20 年になりますけど、これはそれなりに、その成果が出てきていると思うんです。

委員 前からこういうのが出ていて、現状で良いかなって思うんですけど。もう少し見守ってということでしょうか。

事務局 生涯学習であれ社会教育であれ、行政が予算を当ずると成果が問われるんですね。特に生涯学習の理念が出てきたときに大量のお金が投下されたことに、その学習成果をどう生かすのかということが、一番大きなテーマだったんですね。どの街のどの機関も人材バンクと言うのを作ったんです。すべて失敗したんです、成功している例を聞いたことがない。まずその成果をどういう形で生かしたいかが、個々すべて違います。運営委員がさっき言われたように、それぞれの方々の活かし方をお持ちです。そういう力を借りたいという人たちの、例えばですよ、すぐに出てくるのが学校です。「学校に来てもらえばいいやないか」。ところが、子どもたちと言うのは好きなことしかやりません。いくらどんな形を用意したところで好きではないことをしないという本質を前提にしながら教師は嫌いなこともやっているんですね。だから講師先生を呼んでも嫌いなものはやらない、すると「なんや、この学校は、せっかく私が来てやっているのに聞かないのかい。教師、何しとんねん」という話になってくると学校は「もういいです」って話になって、うまくマッチングすることに非常に労力が必要です。ただ、そういう人たちが成果を全く生かしていないかと言うと、そうではない。学びのためだけに来ている人はそこで学びの充実に来たことが、その人の私生活の中での健康とか豊かさにつながっていることがその人の生き方の変容に役立っている。私はそれも一つの成果だと思います。これが地域分権が盛んに言われる時代になってきます。川西でも第 5 次の総合計画の中心になっている地域分権、地域の事は最低限、地域で解決していきましょう、そのことが、できないことは市がやっちゃいましょう、というような役割分担に、今、変わりつつあります。自治会の加入率は 6 割ぐらい、つまり、入らないという人は殆んどいないということです。そんな中で、ここで学んだ方が、たとえば水資源のことについて学ばれた方が地域に帰られたときに、例えば「水」と言うものをキーワードに何か地域で活動しなければならない、だから私が知っていることを少し協力さしてもらいましょうか、と言うような形で自然と自分たちの地域づくりの中に関わっていただけるといのが私は一番大きな成果だと思うんです。その成果が一番着実な成果であり、また、地域に役立つ成果であって、システムのやっていくというものに限界があるのかなあ、という気がしますね。ですからリーダーを育てるという風に最上段に書かれていますけど、それは言うみんなを引っ張っていくリーダーというよりも、その地域の課題を明確にしていく、このことが課題のように私は思います。学習センターで学んだことを背景に「こういうことが私たちの地域の課題じゃないんですかね」と言う提言を、ごくご

く事前に地域の中、自治会の中、コミュニティの中、ご近所の中で出していただくことで、地域の人たちに「ああ、そうやね。みんなで取り組みましょう」というような雰囲気を作っていただくことも、また、地域リーダーの大きな役割、その意味で、生涯学習センターで高度なことを学ばれたことが、即、その学問としての成果と言うような形になっていないとしても、そのことは、じわじわと土の中に水がしみ込んでいくような形で、私は、この 20 年間、地域の中で大きく反映され始めているんじゃないかと思いますね。自分たちで、ほんとうに仲間内だけで勉強会を開いて、そうすると勉強会に 5 人集まったとするとその方を中心に、あと 4 人の方々に成果として広がっている。この小さな広がりがいくつも重なっていくことで、市内全体をカバーできるという成果の出し方が、いちばん確実な成果なんではないでしょうか。

委員長 そういうのは、中央公民館のグループなんか、最たるものですよね。どんどんグループ化して行って、そして、そのグループが、どんどん成長していく、続ける事によって成長して行けるんですよね。だから、公民館活動ってのはそういうのがあって生涯学習センターもグループ化してのがある程度、中央公民館ほどはないにしても、意識が高まってくるというか、それぞれ卒業した方の。それはまた、大きな財産となって行くんじゃないかと思いますね。

事務局 結構このレフネックにこられている方で、公民館活動をやっておられる方って結構多いんです。ですから、こちらで学ばれた方が、今度は公民館活動の中に知識やあるいは経験をまた活かしていただいて、公民館活動の方の充実を図られているというケースもあります。我々が問われる定量的な成果を出しなさいといわれると辛いですが、定量化されないが評価というのであれば、地道に成果を上げられていっているのではないかなというのが実感しているところです。

委員 地域にもよるのかもしれないね。私たちの地域ではあまり見えていないです。

事務局 私が校長をしております時に、保護者の方や地域の方によくお話ししておりましたけれども、新たにできた住宅団地というのは、非常に均整のとれた、清潔で煩わしさを排除した町を作ってきたんですね。煩わしさの中には人間関係も実はあって、そういう煩わしい人間関係を切り捨てるところに生活の平穩を求めてこられた団地が、実は川西市は殆んどだだと思います。ごみも落ちていない、川も護岸コンクリートで整備されて、ごみを捨てたらだめです、中に入ってはダメですよという形だったのですが、今、次第に高齢化、少子化していくなかで、本当にそれがいいのかなと言う課題が各住宅団地に出てきています。子ども達が遊ぶ場所一つ、あるいは、高齢者の方が寄り合って世間話するところもない、ということで新たな町の形が検討される時代、あるいは、もっと言えば、煩わしさをもう一回取り戻しませんか、子どもたちがギョアギョア喚いている声が煩わしさではなくて、豊かさに感じられる町にもう一回しませんか、ということが何処共にあると思います。そういった中で学ばれた方が、分野は違うとしても、深いところまで学ばれた方がいるということがどこかで生かされる時代がそろそろ来ているように、やっと時代に生涯学習の理念が追い付き始めているのではないかと

うのが、17 年生涯学習に携わってきた私の、やっと時代の方が追い付いてきたのではないかとそんな気がいたしますね。

委員長 それと、リーダー養成とよく言われますけど、リーダーと言う特質に恵まれた方っていうのもありますし、それと、短期間の勉強で、それを人に教えるっていうのは、到底無理なんです。教えるということはそんなにたやすいことではないと思うので、行く方は良いけれども、受ける方はどれほどの満足感を持って学習できるかという問題もありますから、その辺やっぱり、ある程度厳しく考えた方がいいのかなとも思いますよね。でも、生涯学習センターってのはレフネックで学んだ生徒さんは川西に広まって小さな芽をどんどんと芽生えさせていっている、いくつか育っているということがあるような気がいたします。

次は生涯学習センターの移転についてです。

事務局 報告させていただきます。お配りをいたしました資料の最後に 2 枚ものの資料をつけさせていただきました。昨年度末までの段階で、生涯学習センターが今後、移転します、という報告をさせていただきました。時期につきましても平成 25 年度の頭からというお話をさせていただいていたのではないかなと思います。状況が大きく変わってまいりました。改めてお話をさせていただきたいと思います。現在 12 月議会が開かれておりまして、明日が最終、12 月議会の中で公共施設の再編につきまして議会でご了承いただいた内容で今後進めていくこととなりました。

まず公共施設の再配置というのがなぜ必要かというところから話をさせていただきます。生涯学習センター、中央公民館、文化会館の施設の老朽化と耐震工事をしなければならない費用も沢山、こらにつきまして老朽化と耐震化を行うよりも、どうするかという課題が残っております。その中で大きなものとして中央公民館とこの生涯学習センター、もう一つは新たな住民ニーズへの対応ということで、住民の方々から生活の状況が変わる中で、役所のいわゆる 9 時 5 時の対応時間帯のサービスに限界が来ている、これを超えたサービスの提供を求められるケースが多くなってきております。それからもう一つ、市の財政が豊かなときに多くの資産を抱えております。例えば、アステであったり、パルティであったりという商業施設があるわけですが、ここに陰りが見えて来て空き床が出て来ており有効に活用できないかという。それと中央北地区が再整備される中で、地区内の支障物件、言い方が悪いですが、このまま維持しておけない施設、たとえば、中央公民館とこの生涯学習センター、老朽化と耐震化を考えると、置いておくことが出来ない施設がいくつかあります。そういったものを総合的に再配置して行こうということで、今回の計画があります。

以前にお話しさせていただいた時には、平成 25 年 4 月アステの方が変わります、候補としては 3 階の飲食店が中心に入っております店舗スペースと、アステの会社が入っておりますバックヤードの事務所あたりとに移していきますという計画でございました。この 4 月以降計画が具体化していく中で私のほうからも、生涯学習を支えていく施設として、そういう風な飲食街の中に教室を作ることが、飲食店と共存していくことがお互いの相乗効果をもてるかどうかと話しました。それとアステの救済策、経営を市がどのように支援するかも総合的に考えた中で、二番目の多機能型市民セン

ターをアステの中に作ってはという議論が萌え出てまいりました。アステ川西の6階、アステホールと朝日カルチャーのフロアを、市が買い取って多機能な市民センターを作って、その中に生涯学習センターが入って、それと中央公民館の広域的な機能を移して運営しては、と言う案が出ています。多機能型市民センターの考え方としては、駅前の立地を活かして多くの市民が利用できる、平日、夜間、休日の利用を促進する、それと、生涯学習機能の充実を図っていくをコンセプトにいくつかのポイントを挙げて、新たな施設の検討に入って行きましょうということになっています。生涯学習センターに直接関わる点につきましては、アステホールを大きく2つに割って小分けできるような可動式の仕切りをつけたうえで、大きな講座室を作ると同時に、朝日カルチャーが入っている部分は、市のほうに明け渡していただいて、生涯学習センターが入る予定であったところに移っていただくよう交渉を進める、ご理解いただけないと撤退もあるかと思いますが、そのような交渉を進めております。6階をいくつかに分けながら、その中に生涯学習センターを設けて、平成26年4月に開設ということを進めていくこととなりました。このことによりまして、今の講座室よりも大きく取れますので、レフネックの定員も70から90か100になるかわかりませんが増加できるのではと考えます。駅に近いということで、南から来る人も北から来る人もバスで揺られるよりも交通の便も良くなります。多機能型の市民センターの中にはいますので専用の部屋とはなれません。優先的に何時間かお借りしての運営となります。今までのように、それぞれの施設がそれぞれの部屋を管理しておりますと、空いているときは全館空いている、例えば、日曜日生涯学習センターなどは殆んど使われていない、そこをオープンにすれば使いたい人が現れるかもしれない。効果的な施設の活用を実施して行こうと基本に考えております。生涯学習センターの機能や活動がどの程度保障されていくのかの調整と部屋をどのように改築していくかの検討も必要です。検討と改築に来年1年間かけて、3月の中ごろに移転、4月1日から開館と言うような形で進めていけたらと思います。施設は指定管理者制になるかと思いますが、教育委員会として事業は直営でさせてもらいます、そこにいわゆる常勤の職員を配置しますと市長部局の方と交渉しておるところです。借りるのにどれくらいかかるか、独自の館を持っていないと、登録グループが荷物を置く倉庫などの確保などが難しくなるため、調整の必要が生じることも考えております。ちなみに中央公民館につきましては、中央北地区の整備が完了するまでは、現状の運営を続けることとなります。総合体育館の北側に複合施設を作って公民館はそちらに移転して、川西北地区の地区公民館としての移動を考えております。新しい複合施設の形など今後の検討となって行きますが新たな生涯学習の施設を確保していくという方向で市長部局と調整を図っております。生涯学習センターの移転につきましては平成26年度、これは決定の事項としてご審議いただきまして、ご了承を頂戴したいと思います。今後は登録グループと事業に出来る限り影響のない形だと思いますが、今まで通りとはなりません。どこかに縛りも出てこようかと。これまでできなかったことが出来るようになるという新たな可能性も含みながら、今後の可能性を検討していきます。経過につきましては、来年度の運営委員会の中でもご審議をいただくように、会そのものも生涯学習センターというよりもレフネックの運営委員会という形に衣替えをお願いする状況となるやもしれませんが、また順次ご意見を伺いながら、次の段階に進みたいと思います。2枚目の配置表につきまし

ては、全く決まっておりません。図の左上にエレベーターホールがありまして、エレベーターホールを降りますと右側にアステホールと喫茶があります。下に向かって小分けしている部屋と大きく貸ルームとしているところが朝日カルチャーです。アステホールは非常に中途半端な大きさ、みつなかホールよりも小さく中央公民館の大集会室でやるよりも人数が大きく使いにくい。年間数十回しか利用されておりません。また利用料、金額も高いので、使いにくい。ここを大きく2分割してレフネックの2講座をできればと思います。貸ルームのところを、中央公民館の市域全域の登録グループ、高齢者大学も含めてここで事業展開するよう考えてまいります。

来年度につきましては今年度と同様にレフネックに関するさまざまな事業については、させていただきます。登録グループにつきましても3月まで活用していただき、3月には移転の都合によりご使用できないことも調整していくことを考えております。以上報告させていただきます。

委員 合唱しておりますとここはピアノが4台あり結構使用しております。以前3階のフロアに移転とお聞きした時にはピアノは置けないときいておりますけれども、それは大丈夫でしょうか。

事務局 今後の課題です。やはり市全体の状況に合った使い方を考えます。これまでの活動と環境の保障も考えないといけません。新たな視点で考える段階に来ています。状況に合った施設のあり方、使い方を考えます。専用の館でないのでピアノの台数は限られます。こちらではピアノの音を出しても1階まであまり影響がなかったけれども、今回はワンフロアです。防音がどの程度利くのかということも含めて考えていかないと。出来る限り今の活動の維持をしたいと思っておりますけれども、今まで通りは無理です。正直に申し上げます。

委員長 今までのところを聞いておりますと、要するに多機能型市民サービスセンターと言う仮称となっておりますが、生涯学習センターはこの中に組み込まれてしまうということで、現実的に生涯学習センターというのは、なくなるわけですね。レフネックは残るけれども。

事務局 生涯学習センターという名前になるかどうかはわかりませんが、多機能型市民センターの中に生涯学習センターの機能は残ります。専用の館は持ちませんが生涯学習センターという機能は残ります。

委員 事務局なんかはこのフロアとは別ですか。

事務局 このフロアの中にします。市長部局は機能はもういい、事業だけ残ればいいと考えますが、教育委員会としてそれでは困りますよと。教育委員会が実施するのは、学習スペースを提供しているのではなくて、あくまで社会教育という教育機能を我々は提供しているのだから、教育を切り離してもらっては困る、教育を維持していく人は必要と主張します。例えばこれだけの教育委員会職員が足を運んで交渉しているから、こ

れだけの事業ができるのであって、指定管理を受けたが、ある一定のお金の中で利益を上げながら実施していかなければならない指定管理者がこれだけのことをするのは無理でしょう。質を落とすのであればなくした方がいい。やる以上は、今までの質は守っていく、その姿勢を我々は貫く方針です。

委員長 レフネックというものだけ残すとおっしゃいましたけど、レフネックというのは川西短期大学みたいなものですか。

事務局 今までは生涯学習センターという建物があって、この中に生涯学習センターという機能が存在するわけですね。今までは機能と建物とが一体だったんですけど、建物がなくなってしまう。機能そのものは向こうに移りますので、生涯学習センターという機能を運営していただく委員会としてこの委員会を設置しながら実施していくのがいいのか、あるいは、レフネックの運営委員会と言う形でご協力をいただくのがいいのか、今後は全体的なバランスも踏まえて今後考えていかなければならないかと思います。

委員長 市民の教育機関としての生涯学習センターは終わったということでレフネックは残りませうけれども。

事務局 そこなんですよ。今、生涯学習センターという館があって生涯学習センターの機能が座っています。今後は生涯学習センターという館はありません。機能は新しい館に残るのです。

委員長 じゃあ、生涯学習センターは残るんですね。生涯学習センターが持つてる事業そのものもそっくり移るといことですか。

事務局 そっくりかどうかはわかりません。

委員長 わからないのですか。

委員 行政として、多分、市長部局が機能を「生涯学習センター」と呼ぶことについてはいかがですか。

事務局 生涯学習センターという名前がよいのか、新たな時代を見据えたような愛称がよいのかは別にして、生涯学習センターとしての機能を残す以上は市民センターの一部の事業と言う呼ばれ方をしてもらっては困る。

委員長 多機能型市民サービスセンターでは生涯学習センターという意図が全く感じられないわけですね。多機能型市民サービスというのはね、この名前になれば生涯学習はずれてきますよね、観念的に。

事務局 よろしいですか、多機能型市民サービスセンターと言う館が 6 階にできます。その中に

各種行政案内であったりとか相談であったりとかが入ります。生涯学習センターの機能もその中に入ります。

委員長 生涯学習センターと言う名前は残りますか、その中に。

事務局 その名前で残すのか、愛称で残すのかは今後の検討課題、

委員長 そうですね、是非とも残していただきたい。

事務局 我々としては機能を残す以上、生涯学習センターが存続していると考えます。ただし今までの生涯学習センターの名前にこだわる気はございません。たとえば川西市学びの館、例えばですよ、そういう名前になった方が市民に近い存在として認識していただけたら変更も可能かと。

委員長 ですから、生涯を通じて学習の場がここにあるんだということが、市民に分かりやすい名称を考えていただきたいと思いますね。

事務局 看板にこだわる事で埋没することもありますので、そこは考えていかないと思います。

委員 よく大きな館の中でこのような市民サービス、これと、あれがありますよね。その中にやはり形と言うものは集合の中味を表す一つの手法ですから、名前が埋没してしまうとその機能がでてこないで、これだけの事業を、講座をやってこられた川西市ですから、できたら残した方が良いのかと。

事務局 そうですね。いちばんの問題は単独で館を持てるかということ、財源の裏付けがもう無いということです。建て直したら簡単なようですが、教育だけでこれだけの館は、もう持てない。将来的にこちらを売却して他のものに転嫁していくという考え方が大きな流れとなっています。

委員長 まあ、これだけの広いスペースですから他に教室とかお考えになって、収益とかも多分関わってくると思いますけど、生涯学習センターの生涯学習と言う言葉を、どこか看板を残していただく方が良いように思います。

委員 大きいものを愛称として、そこにサービスセンターをつける方がやりかたとしてはと思いますが。

事務局 そうですね、どういう名前にするかというのは、全く白紙です。案は出ておりますが、それこそ、やわらかな愛称をつくってその中に川西市生涯学習センターという名で入るのか、どのような名前に入るのか、これからです。最終的には市長を含めて、機能を残すということは建物を失ったとしても、そこで行われている事業とそれを行う職員それと機能は残していくというのが我々の移転の原則として主張しております。

委員 機能を残しても名前を失ったら滅びてしまう。

事務局 多機能型市民センターのなかでレフネックをやっていますよ、と言う形にはしません。どのような名前になるかはわかりませんが、生涯学習センターという存在を置きながら、そこに職員をおきながら事業を展開していきます。中央公民館にある市域全体を対象としている事業もこの中に組み込みながらいかざるをえないだろうと。この館の利用率も必要となります。このフロアを買って運営するには莫大な資金が必要になってまいります。見合うだけの稼働率が求められます。レフネックだけでは稼働率を上げることはできない、となると、生涯学習センター事業を縮小しないといけなくなる、そういった方も考えていく必要があります。

委員 来年の3月までここは使えるんですよ。

事務局 3月になりますと移動もありますので実際に活動できるのは2月末までになるかと、考えております。

委員 グループの活動は26年度からはできなくなる。そういうのがグループにとっては大きく関わってきますから、練習できなくなるんですよ。練習の回数が今でも足りないくらいなんです。その辺の支援とか協力とか、本当に確保できるのか問われているものですから、3月までも使えて、以後も確保できますよ、というのがなければ練習場所を探さないといけなくなるんですよ。

事務局 占有の館を持てなくなりますので、100%というのは、無理です。代わる形をどの様にしていくのか、あるいは利用していただく時間帯をどのようにすみ分けながら活用していただくのかを考えていかななくてはならない。今、既得権というつまりですけど、そのままの状態を横滑りというのは難しい、これは建て直しをしないと無理です。そういうことはできないんです。

委員 と言うことは、ピアノを持ち込んでいただいているんですけど。市民合唱団さんもそうですし、ほかの合唱団の方もそうなんですけど。

事務局 先ほども申しましたように、当初の3階の移転とくらべると我々も条件は頑張ったつもりです。バックヤードではピアノは持っていけない状態でしたが、今回は1台でも2台でも持っていけるのではと。ただし、今のように4台をフルに使うというのは、これはちょっと難しいです。

委員長 多機能型市民サービスと言う大きなグループの中に入るとすれば、何て言いますか民間の事業が入ってくる可能性もありますね。

事務局 考えられます。指定管理者制度をとって、我々がこの時間を使いますよと最初に住み

分けをして、そのほかの時間帯については、お金を取っているんな事業が入ってきます。我々のほうが「この時間、使いますよ」と貰っていても、予約が入らなくて使わない場合には向こうに明け渡すことになります。できるだけ誰も使っていない状況をなくすことで市民の利用度を上げていただくことを考えます。そして、たとえば公民館やここであると、ある程度の減免で使えるというのが、果たして良いのか悪いのかって言う議論も一方ではございます。平等のお金を取るべきという議論です。しかし、登録グループとしてご利用されている方々へ、行政として一定の便宜を図って問題ないのでは、と言うのが我々の考え方ですけどもね。それをどこまで主張しきれるか、また、理解していただけるか。例えば登録グループに入っていない市民の方々が不公平感を感じておられる、これは事実だと思います。そのあたりを、どう調整していくかです。

委員長 現在の館があればよろしいんでしょうけども、複合施設に入ってしまうとそういう問題が起こってくると思いますね。

委員 お聞きしたいんですけど、現状アステホールは大きいスペースを取ってますよね。それを2分割なさって同じような機能をもったホールを作るというわけじゃないんですよ。アステホールに代わるようなスペースをどこかに。

事務局 アステホールの規模でしたら、みつなかホールを十分使えます。これも、すこし住み分けましょう。「アステホールと同じ、或いは、みつなかホール同じような収容人員のホールが、二つ要るんですか」からスタートしているんです。結局アステホールもほとんど使われていないじゃないか、365日のうち何日使われているんですか、という話になると、もう、この大きさは要らないでしょう。

委員長 その問題点は多目的ホールなんです。要するに、音楽ホールじゃないからできていないんです、音響装置が。ですから音楽関係に使いにくい、広さも中途半端、半分にして分割して使ったこともあるんですけど。あのホールは市のほうの持ち物じゃなかったんですけど、営業的に多目的ホールとなさったのが難しいってのがありますよね。

事務局 市が買い取る以上は収容人数についての住み分けを考えていきます。100名若干オーバーくらいの規模であれば、中央公民館の大集会室で十分ですし、それから300人近くであればみつなかホールも可能です。そういった住み分けを自主的に考えていくことが必要です。

委員 そしたら、工事に関しては来年度に入ればすぐに始まるわけですか。

事務局 いいえ、今後はどういう風な部屋割りにするかを考えていかないといけません。

委員 来年度、アステホールをまた使いたいとか、いろいろ考えている部分があって、そしたらそれは、いつごろまでに改修工事にはいるのか、全然白紙ですか。

事務局	そのあたりは、聞いておりません。アステホール運営がどうなるのかは、我々も聞いておりません。
委員	そうですか。そしたらイベントやるのにアステホールは外してどこか会場を考えていった方がいいですね。
委員	すみません、このアステホールの中にいくつか区切っているんですが、いくつか区切るような仕組みにするんですね。
事務局	と言うようなことを、いまのところ考えているんですけど、それが本当に良いのかどうかは来年度に入って検討して、形を決めて後半の半年をかけて工事に入るという形になると思います。その前段で登録グループさんのご意見や、先ほどからピアノの話も出ております。どこまで組み込めるのか、ご意見を活かしていけるのか、そういった検討を来年度前半ぐらいはかけていかなければならない。先ほども申しましたように、教育委員会の施設でなくなりますので、教育委員会単独で事を進めることが出来なくなります。市全体、オール川西の動きの中でどのように組み込んでいくのかと言う話になります。
委員	間仕切りなしでオープンスペースで今のアステホールと同じように使えるっていうのは、
事務局	それは無理だと思います。と言いますのは、中途半端な防音になってしまって、2 つに分けたときに隣のマイクの声が隣りに聞こえるということであれば、たとえば、うちのレフネックの事業もできなくなります。アステホールを二つに分割するのであれば、右と左の部屋の音は聞こえないような完全な防音にしまわないと結局何にも使えない状態になります。どういう使い方を想定しながら工事をするのかということが大事になります。
委員	防音をするから間仕切ってしまうということですね。
事務局	と、我々は主張したい。ただ、「いやいや、そうにはならないよ」と言われるかもわからない。そこは何が一番いいのかと言う話を考えます。
委員長	多分問題は山積ということになりそうですが、出来るだけ教育委員会のほうで踏ん張っていただいて、よろしくおねがいします。あの、せっかくの館、生涯学習やるものにとって館があるっていうのがベストだと思いますので生涯学習の観点から、ぜひまた良い結果を出していただきたいと思うんです。川西も進歩していくので、今のままずっと、と言うわけにはいかないのかもしれませんが、そういうことで、よろしくお願ひしたいと思います。どうもありがとうございました。
事務局	ご審議いただきまして、ありがとうございました。次回は、4 月上旬頃に予定しております。日程につきましては、また事務局の方で調整させていただきますので、どうぞよろしく

お願いいたします。

4.その他

その他特記なし

閉会 12時16分